

---

# 山茶花（さざんか）

牧屋美邦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

山茶花まいたんか

### 【Nコード】

N8640D

### 【作者名】

牧屋美邦

### 【あらすじ】

茶店の娘お峰は、ふとしたことから時三郎と深い仲になる。駆け落ち同然に生家を出奔するが、二人の蜜月は長くは続かなかった。男のために身を墮とすお峰と、時三郎に兆す女のかげ。

**第一話 木枯らし（前書き）**

R15作品、性表現を含みます。

苦手な方、15歳未満の方は、ブラウザバックでお戻りください。

似非江戸風味、全六話の予定です。

## 第一話 木枯らし

辰次が足を止めたのは、その娘の表情がひどく暗かったせいだ。

立ち止まった拍子に首筋を木枯らしが撫で、慌てて綿入れの前をかき合わせた。掛け行灯に明かりがとまり始め、軒を連ねた料理茶屋や水茶屋は賑わいを増してくる刻限である。

茶と鼠ねずの縦縞ねずに柿色の前垂れを掛けた娘は、年のころ十七・八、近くの茶屋の小女のように、こぎれいな面立ちをしていた。

娘は、枝ばかりになった寂しげな柳の下で、どんよりした池の水面を見つめて動かない。かげりを帯び、思い詰めた様子なのが、辰次には気がかりだ。

「お峰っ、なに油売ってんだい。忙しいんだから、ぼんやりするんじゃないよ」

茶屋の一軒から険けんのある声が響く。お峰と呼ばれた娘は、悪戯を見つけた子供のように首をすくめた。

「すみません。今すぐ」

小走りに駆け出そうとして、こちらを見つめている辰次と目が合った。一瞬驚いたように目を見張ったあと、辰次を岡おかつ引きと見定めてか、丁寧ていねいに頭を下げると、店の裏口へと回った。

辰次は、しばし腕組みして記憶を手繰り寄せる。

お峰が入っていったのは、最近代がわりして乙おつな酒肴を出すようになったと評判の、料理茶屋である。味噌仕立ての猪鍋を、風味のいい粉山椒を振って供すという。辰次の懐具合ではそうそう立ち寄れない店であるから、味わう機会もないが、それでも噂話を思い出すだけで腹の虫が鳴った。

元より、気がかりな事は、見届けずにおれない性分なのだ。加えてこの寒空である。軽く肩をいからせると、辰次は『相模や』と染め抜かれた暖簾をくぐった。

明るく弾けた「いらっしやいまし」の声と、低く遠慮がちな辰次

の声とが交錯する。

「忙しいとこ、すまんな。邪魔するよ」

「あら……親分さん、お役目ご苦労様でございます。今日は、ご用の筋でございますか」

顔に貼り付けた笑顔は同じだが、辰次の顔を見分けた途端、声の調子は幾分か冷ややかになった。

吊り目がちの狐に似た雰囲気の女で、微笑むと口元に愛嬌がある。年の頃、風体から見て、腰を痛め隠居した『相模や』先代に代わって采配を振るっている、おせんという後添いの女だろうと、辰次は当たりをつけた。

おせんはさりげなく身を寄せ、辰次の手に僅かばかりの金子きんすを握らせる。書き入れ時だから、これで大人しくお帰りくださいと、いわんばかりだ。

そんなあしらいには慣れっこなので、素知らぬ顔して金子を袂たもとに滑り込ませると、

「こっ寒くつちゃあ、ねぐらまで真っ直ぐたどりつけねえ。熱いのを一本つけてくれねえか」

伝法な口調でいい、どんぐり眼でおせん顔をじつと見た。

「辰さんは、伏し目がちにしてれば、それなり男前なのにねえ」と、辰次がねぐらにしている長屋の内儀さん達が陰口を叩く、特徴ある眼だ。目を見開くと、ぐりっとした大きな瞳が子どものようにきらめいて、邪気のない顔になる。知らず知らずのうちに、人の気を緩ませるのだ。

おせんは辰次を、帳場の奥に案内すると、膳を運んでいた娘に、「大急ぎで熱いのを一本、こっちにも持ってきておくれよ」と命じた。

『相模や』は入れ込み座敷の他に、幾つもの離れがあり、忍ぶ仲の逢引にも重宝されているという噂である。おそらくは離れへ膳を運ぶであろう、先ほどお峰と呼ばれていた娘を見送って、

「可愛い娘が入ったねえ。もちつときれいななりをさせたら、看板

娘になるんじゃないかねえのかい」

火鉢にあたりながら、辰次はおせんにいう。

「あたしもそう思うんですけどねえ」

そう答えるおせんの顔は、何やら苦虫を噛み潰した風だ。

「実家で臥せってる父親のためにも、もっと稼げる手だてはあるんだよって、いつて聞かせてるんですがね。当の本人にその気がなくって」

もっと稼げるとは、場合によっては色も売るという意味だと、辰次は察した。

『相模や』に限らず幾つかの店では、客の望みと銭次第で、商売をする女たちもいるという。もちろん、大っぴらな商いではない。

そのうちの幾ばくかは、女将であるおせんの懐にも入るのだろう。辰次は適当な相槌を打ちながら、細身のわりに脂の乗った、おせんの首筋を眺めた。

酒を運んできた、お峰の後ろから、「女将さん、藤の間にご挨拶をお願いします」と声がかかる。おせんの店は、なかなか繁盛しているようである。

「すまねえな。名はなんていうんだい」

おせんが中座した奥の間で、酌を受けながら辰次は訊ねた。

「お峰と、申します」

辰次が杯を干すと、お峰は今にも笑い出しそうに、口元に手を当てている。先ほど池の傍で見た表情とは打って変わって、年相応の愛らしさがあった。

「どうした。俺の顔になんか付いてるか」

「親分さんとは、ずっと以前にお目にかかった事があります」

辰次のどんぐり眼を、ますます大きくさせるような事をいった。

お峰の生家は、王子稻荷参道の茶店だという。探索の折に辰次が立ち寄ったのが五年ほど前だと、お峰は遠い目をした。辰次がちょうど、茂蔵親分の下で働き始めた時分である。

「たった一度立ち寄っただけなのに、よく覚えていたなあ」

つきだしの、よく味の染みた蒟蒻じゆじゆを口に放りこんで、辰次が呷くと、

「親の手伝いをして偉いねえと、ほめてくださいました」

お峰も懐かしそうに微笑む。笑うと細められる目元や花がほころんだような唇に、陽だまりで甘酒を啜った日を思い出した。

「おお、あん時の」

ぼんと膝を打つ。

参道を歩けばほのかに梅が香る季節で、しゃちこばって茶を運ぶお峰と、それを心配そうに見守る茶店の親父の姿があった。

格好をつけてお峰に声をかけたは良いが、後ろで茂蔵親分に「調子に乗るんじゃないねえ」と小突かれたのを、懐かしく思い出す。その茂蔵も、二年前に鬼籍に入っている。

「おとつつあん、おつかさんは、どうしていなさる」

訊ねた途端、お峰の表情が曇つたのを、辰次は見逃さなかった。

「おとつつあんは病で臥せております」

「そうか。お峰ちゃんも色々大変だな」

労るようにいっても、お峰の屈託した様子は晴れない。

廊下が急に騒がしくなり、酔客に愛想をいうおせんの声が聞こえた。

ふいに、お峰は継るように辰次を見つめ、

「あの……私が此処に居ることは、家には内緒にしてください」  
深々と頭を下げた。

「内緒つて、お峰ちゃん、そりゃあ……」

「どうか、どうかお願い致します」

額を畳に擦りつけ、重ねて懇願する。

辰次が弱り切っていると、酒の匂いをまとわりつかせて、おせんが戻ってきた。それを潮に、辰次は腰を上げた。

暖簾の向こうは今にも風花がちらつきそうな按配あんばいで、外気の冷たさに首をすくめていると、見送りに出たおせんが耳元で囁いた。

「お峰にはね、悪い男がついてるんですよ」

酒と博打に明け暮れ、女からうまい汁を吸って生きているような男と、おせんは吐き捨てるようにいった。時三郎というその男の名と、お峰と一緒に暮らしているねぐらの場所を聞き出して、すっかり日暮れた通りを歩き出す。

辰次の脳裡には、梅の香に包まれた朗らかなお峰の姿と、池の傍で立ちつくすお峰とが、交互に浮かんだ。その二つが繋がるようにで繋がるらない。魚の小骨を呑んだような面持ちで、辰次は大きなくしやみをした。

木枯らしの吹く夜はものを思うかな

涙の露の菊襲きくがさね

夜半、疲れきった身体を引きずって、お峰は家路を急いでいた。どこからか、風にのって小唄が聞こえてくる。

客に勧められて飲んだ酒で、胃の腑のあたりが熱く、気分が悪くなるほどだ。なのに、手足はひどく凍えていた。お峰はあまり酒が好きではないが、時には飲むのも仕事のうちである。冷え切った指先を擦り合わせ、温めようと息を吹きかけてみる。

俯いていると心まで暗くなる気がして、冴え冴えとした三日月を見上げた。

「お天道さまやお月さまは、良いことも悪いことも、みいんな照らして見ていなさるよ」

父母に、そう教えられて育った、お峰だった。

時三郎の誘いに応じて、駆け落ち同然に出奔してからというもの、生まれ育った家を忘れた事はない。

小さな裏庭で飼っている鶏たちに毎朝餌をやるのは、お峰の役目であった。卵を産んでいれば朝の膳に供され、おとつつあんが啜る粥の真ん中に、ぼとりと黄身が落とされる。卵色した米粒を見つめ



ていると、「お峰にもひと口やろつな」と、おとつつあんは茶碗を差し出すのだ。それを微笑みながら眺めている、おつかさんの顔。けして裕福ではないが、優しさに包まれていた日々を思い出す。

あの取り澄ました横顔みたいなお月さんは、父や母が眠っている部屋も、照らしていないさるだろつか。そう考えると、お峰は胸が締めつけられるような、遣る瀬ない気持ちになった。

寝静まった棟割長屋の、あまり建てつけの良い引き戸を、苦労してそつと開ける。時三郎はまだ帰っていない。寢床は、今朝お峰が出かけたときのままだ。

火鉢の炭をおこし、凍えた指先を温める。人形ひとがたに脱ぎ捨てられた夜着よぎは、時三郎のかたちが、まだそこにあるように思われた。

「時さん」

小さく呟いて、蒲団をそつと撫でる。

今日、昔のお峰を知っている親分さんに、出会ってしまったよ。ねえ、どうしよう。またどこかへ逃げないといけないのかな。

いない男の匂いを嗅ぐように、お峰は結髪のまま身を伏せた。頬に触れる夜具は、しんと冷たくて、心まで寒々とする。

「重ぬる夜着も一人寝の……」

小唄の続きをくちずさむと、涙がはらりと落ちた。

## 第一話 木枯らし（後書き）

知っているとかかりやすいかもしれない用語集

・岡っ引き（おかつびき）……御用聞きとも。町奉行所（江戸の警察機構）同心の個人的な手下で、密偵通報の役目をしていました。公的に認められた仕事ではないので、給金は同心から貰う小遣い程度だったようです。

・夜着<sup>夜の着</sup>……袖と襟のついた大型の着物のような形で、綿が入ったもの。冬用の掛け蒲団にあたります。

## 第二話 紅梅（前書き）

R15作品、性表現を含みます。

苦手な方、15歳未満の方は、ブラウザバックでお戻りください。

似非江戸風味、全六話の予定です。

## 第二話 紅梅

時三郎が、お峰の生家である茶店の客としてやって来たのは、二年近く前のことだ。

冬の気配を残していた風も昼過ぎには止み、うららかな日和になった。参道に並ぶ梅の蕾は、まだ固く、参拝に訪れる人もまばらである。

おとつあんは近在の寄り合いに出かけ、おつかさんも末の妹が産気づいたと使いが来て、少し前に慌ただしく茶店を出て行った。空の野菜籠を背負った老女の客を見送り、片づけを終えると、お峰の仕事は一段落した。最初はあぶなっかしかった茶店の手伝いも、近頃はすっかり板についた。

お峰の生家は、王子稻荷神社の参道にある、こぢんまりとした茶店である。参道に面して、赤い毛氈もうせんを敷き、煙草盆を乗せた縁台が置かれている。軒下では、甘酒と染め抜かれ少々色褪せた布が、時おり風に揺れている。

あとひと月ぐらいで、川向こうの、飛鳥山の桜が咲き始める。花見と参詣に立ち寄る客が、大勢やってくるだろう。この小さな茶店も親子三人で、てんてこ舞いになるはずだ。白く淡く薄墨を刷いたような、桜が満開の春を想って、お峰の心は、やはり浮き立つのだった。

ゆつくりと雲が流れる様を眺めながら、お峰は朝餉あさけのとき、おつかさんがしていた噂話を思い出した。

庄屋のお嬢さん、そうそう、お美代ちゃんにね、縁談がきてるんだってさ。何でも大晦日に狐火を見に来たときに、お美代ちゃんを見初めたんだそうよ。蠟燭問屋ろうそくの跡取り息子だって、めでたいねえ。

手習いで机を並べたこともあるお美代は十六で、お峰より一つ年上だった。お峰のことを実の妹のように可愛がってくれたが、今ではきれいな振り袖を着て、しずしずと茶店の前を通り過ぎるだけである。

あのお美代ちゃんがお嫁に行くかもしれない。そう考えると、お峰はなんだか落ち着かない、おかしな気持ちになった。

蝋燭問屋の跡取りつて、どんな人だろう。お美代ちゃんと似合いの夫婦になれるのかしら。

いつの日か自分も、誰か好きあった人と添うことができるのだろうか。楽しみのような怖いような、そんなことをつい考えてしまう。

一陣の風が舞った。砂埃を巻き上げ、春を告げる風だ。茶店の軒先に垂らした幕が、音を立てて震える。

袂で顔をおおったが、間に合わず、お峰は店先で目をしばたかせた。

「すごい風だね。少し休ませてもらおうか」

思いがけず近くで男の声がして、半歩ほど飛びすさる。

まさか、狐が化けたんじゃないわよね。

お峰は胸元に盆を抱えたまま、背中から荷をおろしている男を眺めた。

稻荷神社のお膝元だけあって、この界隈では狐に化かされたという風聞に事欠かない。

「たとえ、お狐さまだったとしても、普通のお客様と同じようにするんだよ」というのが、父親の口癖だ。じゃあ、おとつあんは、お代が葉っぱに変わってもいいのと、お峰は訊ねたことがある。誰のおかげで、この店があるんだと、溜め息混じりに諭されて以来、二度と問い返したりはしなかった。

「団子と、それから甘酒もいただこうかな」

「は、はいっ。ただいま」

男をぼうと見つめていたお峰は、弾かれたように動き出す。甘酒

を温め、炭火で団子を炙りながら、男を再び盗み見た。

耳も尻尾も見当たらない。だが、狐が化けたかと思うほど、男の横顔は凜々しい。

刷毛先を細く長く整えた銀杏鬚まげと、女であったならと思わせる切れ長の眼。くつろいだ口元には、意外や人好きのする無邪気さがあった。

ぱちんと炭火が跳ね、慌てて団子に醤油だれを塗る。芳ばしい匂いがした。

「お客さんは、小間物屋さんですか」

海苔でくるんだ団子と甘酒をすすめて、問う。男が縁台に下ろした荷には、抽斗がいくつも見え隠れしていたからだ。

「ああ、ここいらの家を回ってきたところさ。お前さんは、紅や白粉に興味があるかい」

聞かれて、お峰は曖昧に頷いた。

もちろん興味はある。お美代ちゃんみたいに、きれいに化粧もしてみたい。でも、新しい着物も作れないほどの台所事情を思えば、とてもそんな余裕はなかった。

お峰が今着ているのは地味な木綿縞で、今日産気づいたおつかさんの妹からのお下がりだ。このところ急に背が伸びたため、裾からはくるぶしがちよっぴり覗いている。

そんな逡巡を見抜いてか、男は面白そうに目を細め、甘酒を啜る。茶碗に添えられた手は色白で、細い指がしなやかそうだ。

お峰は、ふと自分の手を見遣る。水仕事で荒れ、あかぎれをこさえている指先を。

この手で甘酒や茶をすすめていたかと思うと、恥ずかしくなり、両手をそろそろと背中に回した。その動きを、男が見咎める。

「こりゃ、かわいそうに。ちゃんと手当てはしているのかい」

男は慣れた手つきで腕を伸ばすと、お峰の手を取った。娘の小さな手が、男の掌で包まれる。暖かく、力強い手だった。

「いいものがあるんだ。ちょっと待つてな」

男はそういうと、気ぜわしく風呂敷包みを解き始めた。濃鼠こいねずの風呂敷に包まれた丈高く四角い箱には、抽斗が沢山ついていた。それをひとつずつ開けていく。

浅い抽斗には、色とりどりの模様が入った、紅猪口べにちまこらしきものが伏せてある。白粉が入っていきそうな瀬戸の蓋もの。蒔絵で彩られた薄い箱には、何が入っているのだろう。

お峰とて年頃の娘である。気づくと、店先に広げられた荷を、興味津々で覗きこんでいた。細工の施された櫛こしに笄こしがいなど、見ているだけで溜め息が出る。

「そら、見つかった。こいつだ」

取り出したのは、何の変哲もない白い瀬戸の器だった。蓋を取ると、鶯色の練り薬が見える。ふんと青臭い香りがした。

手招いてお峰を縁台に座らせる。男は指先に練り薬をすくい取り、お峰の指に丹念に塗りこめた。

「しみるか」

「いいえ」

男との距離が近い。言葉が囁きに聞こえ、耳朶には吐息の温かさを感じるほどだ。次第に鼓動が速くなり、お峰の頬は薄桃色に染まっっていく。

練り薬には何かの油が含まれているのか、男の指が絡みつき通り過ぎると、肌は艶やかに輝き始めた。まるで手妻のようだ。

手の甲や指を撫でまわされる感触が心地よく、お峰はしばらく放心していたが、男の手当てがとつくに終わっているのに気づくと、大急ぎで手を引っこめた。

「ありがとうございます」

礼をいう声が大きすぎたようで、お峰は再び頬に朱をのぼらせる。胸の内では、小さな太鼓が鳴り続けていた。うるさくてしょうがないのだが、その止め方もわからない。

「湯屋から帰ったら、こいつを塗るといい。ちっと青臭いが、効き

目は保証するよ」

練り薬の容器を娘の手に乗せると、鼻筋に皺を寄せて笑う。くしやりと笑み崩れた表情が、妙に子どもっぽくて、お峰は親しみを感じた。

「あの、お代は……」

「半端な売れ残りだ。気にするな」

男は縁台に団子と甘酒の代金を置き、広げた小間物を店じまいする。荷を背負うと、お峰の顔をつくづくと眺めた。

「お前さん、名はなんという」

「お峰、です」

「ちよつと目をつむってみな」

素直に目を閉じるお峰の前で、男は袂から紅猪口を取り出した。

小指の先を茶碗に浸し、猪口を撫でると、娘の唇にすいと紅をさす。

「そら、見てごらん。この色はお峰ちゃんに、よく似合う」

差し出された手鏡には、紅梅の色に彩られた、いつもより大人びた顔が映っていた。

やはり、この人は手妻師かもしれない。それとも、お狐さまかしら。

お峰が顔をあげると、男はすでに歩き出していた。

胸の小太鼓が激しく鳴っている。何かいわなくちゃ。そう思うのだが、喉が詰まったようになって言葉が出ない。

木々を揺らす強い風も止んでいた。

「また来るよ」

そう告げた男の名前すら、お峰はまだ知らなかった。

寒さが行きつ戻りつしながら、梅の蕾が膨らんだ。花がほころんで良い香りを漂わすようになる、参道には人の往来が増えた。

仕事の手が空くと、お峰はいついつい参道を眺め、見覚えのある濃



鼠の風呂敷包みを背負った、男の姿を探してしまつた。

何のために探しているのか、彼女自身にもよくわかっていない。似合うといわれた、紅を買いたいがためのようでもあり、それだけでもない気がするのだ。

他にも小間物屋が通ることはある。だが、お峰が出会いたいのは、手妻師のような、あの男だけだ。

春風と共に男がやってきた日を思い返せば、とくんとくんと胸が鳴り出す。そのうるささにも慣れてしまい、あまり気にならなくなつたけれど、日が経つにつれ、焦れるような想いが強くなった。

男にいわれた通り、湯屋から戻ると必ず、もらった薬を塗った。草の葉を煎じたような独特の臭いも、馴染んでしまえば気にならないう。何より男を思い出す、よすがになつた。

夜着にくるまり手に触れると、指を絡め練り薬を塗ってくれた、しなやかだが力強い手の温かさが蘇る。指先で唇に触れれば、男の小指がすつと撫でた感触を思い出す。

そのまま眠りにつくつと、お峰は小間物屋を夢に見た。

ねえ、見て。この手、ずいぶんきれいになつたでしょう。

問いかけると、男は微笑んで何か答えた。よく聞こえなくて、お峰は耳を澄ます。

白く長い指が結髪に触れ、頬を撫でた。男は、また唇を動かす。聞こえないよ、小間物屋さん。何ていつてるの。

男の手に包まれている頬が熱い。のぼせているせいか、男の掌が熱いのか、判別がつかずに惑った。

あつい、熱いよ。助けて、息が苦しいよ。

耳まで火照り、こめかみが脈打つ。目の前にある男の顔が歪んだゆらりと輪郭が崩れ、見る間に狐の顔になる。たまぎる悲鳴をあげそうになって、ようやく目が覚めた。

夜着を引きかぶって寝ていたらしく、肌はしつとりと汗ばんでい

夢で会うことができ、はたして良かったのだろうか。お峰は大きな溜め息をつき、静かに寢床を抜け出した。

明け六つの鐘には間があるようだった。薄明の中、鳥居をくぐり石段を上る。勝手知ったる社の中を進んでいく。この場所で生まれ育ったお峰にとって、境内は自分の庭のようなものだ。本殿の前で手を合わせてから、神社のはずれへと向かう。

朝まだきの肌寒い空気が、さっきまで火照っていた頬に沁みる。東の空の端が、少しずつ白み始めていた。

男はまた来るといったが、今日なのか明日なのか。それとも数カ月後なのか。わからずに待っているから胸苦しいのだと、お峰は心の中で断じた。

足が社殿の片隅で止まる。両腕で抱えられる大きさの無骨な石が、座布団の上に鎮座していた。村人が御石様と呼ぶ、願掛け石だ。願い事を唱えながら石を持ち上げて、軽ければ叶う。重ければ叶わない。

気を落ち着けるために、すうと息を吸った。鼻孔に、かすかな梅の香が届く。

お願いです。あのひとに会わせてください。たとえ、お狐さまの化身であってもかまいません。ただ、会いたいです。

唇の中で呟くと、軽く腰を落とし御石様を抱えあげる。お峰は「あ」と小さく声をあげた。石は思いのほか軽かった。

瑞兆だと信じたい。持ち上げた石の分だけ気持ちを手軽にして、梅の香がするほうへ歩みを進める。社殿の角を曲がると、途端に香りは濃くなった。

神社裏手の細道を行けば、金輪寺の弥陀坊へと繋がっている。天からこぼれ落ちるように咲く、八重の枝垂れ梅が見えた。芳香はそこから漂っているようだ。

視界の隅を何かがよぎった。梅の傍らの井戸に、人影がある。男が一人、もろ肌脱ぎで手拭いを使っている。見かけない顔だ。新しい寺男かと、瞳を凝らす。

「おはよう。……おや」

人影がこちらを向き、喋った。

「茶店の娘さんだったね。たしか、お峰ちゃんだ」

嘘だ。これはきっと、夢の続きだ。願い事が、こんなに早く叶うわけがない。

夢かうつし世か、お峰は確かめるために男に近づく。足もとが覚束ない。下駄で踏んでいるのが、地面でなく別のものに変わったように、ふわりとする。

もし夢なら、まだ覚めないで。

ふらふらと歩みを進めて、枝垂れ梅の下に立つ。薄紅梅の簾すだれに隠れて、お峰は着物の上から、そつと太腿をつねった。ちゃんと痛みがある。

「こまものや……さん」

「そうさ。俺の名は時三郎だ」

着物を整えると、あの笑顔で、男はくしゃりと笑う。

胸の奥から、突き上げてくるものがあった。総身を走り回って膨れると、体から溢れていく。悲しいときだけでなく、嬉しくてたまらないときも、涙は出るのだと知る。

「どうした。どこか具合でも悪いのかい」

「いいえ、いいえ……」

しゃくりあげながら、お峰はただ首を振るしかない。後から後から、涙が湧いてくる。あんなにも会いたかった男の顔が、今はよく見えなかった。

## 第二話 紅梅（後書き）

知っているとかわりやすいかもしれない用語集

・小間物屋……装粧品（紅・白粉・化粧水・櫛・簪・袋物など）を商う人のこと。

小間物という語源には、高麗物、いわゆる輸入品を扱うので高麗物（こまもの）という説と、細かい物を扱うということで、細物（こまもの） という二つの説があります。

店舗を持つ場合もありますが、大抵は細かい抽斗を積み上げた荷を背負い、各家を訪問販売して歩きます。（時代劇などで探索するときに、小間物屋に扮するのをよく見かけますが、よその家へ上がりこんでも怪しまれない職業だったわけですね）

化粧品を売ると同時に、メイクアップの手ほどきもしたり。女性相手の商売ですから、口がうまくて二枚目な方のほうが、当然売上も良かったはずです。

・王子稻荷神社……東京都北区王子にある、関東の稻荷神社の総元締めというお宮。

川を挟んだ桜の名所（八代将軍吉宗が桜を植えさせた）飛鳥山と共に、江戸北端の（正確には江戸の外）庶民に親しまれた行楽地でした。

毎年、大晦日の夜に、関東一円の稻荷神社から狐たちが集まって参詣したという伝承が残っています。参詣する狐たちは、まず装束（まつ）と呼ばれる大きな榎の下で、装束を調べてから参詣したとか。集まった狐たちが灯す火（狐火）によって作物の豊凶を占ったといい、その光景は安藤広重の浮世絵に描かれています。

願掛けの御石様は今でもありますが、金輪寺（王子権現社・王子稻荷神社を管理する別当寺）との位置関係には、かなり嘘が含まれ

ています。

### 第三話 化粧（前書き）

R15作品、性表現を含みます。

苦手な方、15歳未満の方は、ブラウザバックでお戻りください。

似非江戸風味、全六話の予定です。

### 第三話 化粧

地鳴りのような読経が聞こえている。

手習いに通っていた時分、いつもこの声と墨の香りに包まれていたのを、お峰は懐かしく思い出す。だが今ここに、お師匠さんはいない。

「じつとしてな」

「はい」

時三郎の声に、お峰は大人しく答えた。それでも、つい身じろぎする。頬をすべる白粉刷毛がくすぐったいせいだ。

金輪寺弥陀坊にある、寺男の宿坊の一つに、王子村に戻ってきてからの時三郎は滞在していた。宿坊といっても、寝起きができるだけの簡素な小屋である。

刷毛の動きが止まり、時三郎は娘の顔を覗きこむ。

言葉を交わすようになって、心の底を見つめるような男の視線に、お峰はまだ慣れない。射すくめられて息が止まりそうになる。

「ちよいと鬘をいじるよ」

「髪結いも、できるのですか」

「真似ごとだけさ」

時三郎は立ち上がって後ろに回り、挿してある櫛を抜くと、手絡めの赤い布も解いた。

子どもの頃は、おっかさんが髪を結ってくれたが、今では自分で結っている。男の手に髪を触れられるのは初めてで、ひどく気恥ずかしい。

髪油の匂いがぷんとした。櫛が鬘びんの毛をすき、鬘を整える。真似ごとというには手際が良かった。

時三郎の手が結髪から離れると、お峰は急に不安になった。うなじの辺りに、ちりちりと視線を感じるのだ。

「少し衣紋を抜くぞ」

否をいう間もなく、後ろ襟が下に引かれる。うなじから背にかけて、ばかりと開いた空洞が少し肌寒い。

ああ、いま男に肌を見せている。

そう思えば胸の鼓動が速くなる。時三郎に会うために来ているのに、その一挙手一投足に振り回される。落ち着かない気分、お峰自身が呆れ果てていた。

「くすぐったいかもしれねえが、我慢しておくれよ」

白粉刷毛がうなじをすべる。一筋、二筋。その度に、お峰の背を何かが這い上った。

ぞくり。

悪寒とも違う、この甘美なものは何だろうか。

「よし、仕上げだ」

時三郎は前に回ると、紅猪口を取り出した。玉虫色の曲面を、お峰はうつとりと眺める。頬には朱がさし、瞳は酔ったように蕩けていた。

お峰はいつかのように、指先で紅をさして欲しいと心のうちで願ったが、男は紅筆を手に取った。

紅は水で溶くと、玉虫色から赤に変わる。紅をさした娘の顔も、少女からおんなへと変貌する。

「いっちょあがりだ。見てごらん」

時三郎が手鏡を渡す。春まだ浅い日に、茶店で覗いた鏡と同じものだった。

「うちで鏡に映すより、きれいに見える」

「ぎやまんの自惚鏡だからな」

薄く白粉を塗り、紅をさした面は、まるで自分じゃないようだとお峰は思った。華やいで頬を染めた娘が、鏡の中にいる。

「こいつは、朝飯を届けてくれた礼だ。お代は要らないよ」

男はにこりと笑うと、娘の鬘をつつく。お峰は、宿坊で寝起きするようになった時三郎に、不自由のないよう世話を焼いてくれるのだ。



結綿ゆいわたの髪形はそのままに、鬢みづらはきれいに整えられ、赤い鹿の子絞しぼりりが飾られている。

頭を下げて礼をいいながらも、お峰の心には何かかわだかまっていた。

時三郎は小間物屋だ。必要があれば、他の娘にも化粧の手ほどきをする。遊里や町家で、女たちの顔を覗きこむ男の姿を想像して、お峰の気持ちは塞いだ。

「誰にでも、こんな風に化粧をしてあげるのですね」

口に出してから、お峰はしまったと思った。なんとも恪じんぎ気に満ちた物言いではないか。

「ああ、それが俺の商いだ。厭ならもうここへは来るな」

「そんなつもりでいったんじゃ……」

ここへ来られなくなったら、時三郎に会えなくなる。

見る間に、お峰の目に涙が溜まった。

「泣くな。せつかくきれいに作ったのに、化粧が崩れちまう」

男は指先で、娘の、こぼれ落ちる寸前の涙をすくう。

お峰の気持ちは、とうに気づいている時三郎である。女相手の商売ゆえ、惚れさせて一人前、くらいに思っていた。家々を廻れば、時さん、時さんと、袖を引いて誘う女もいる。

目の前にいるのは、十七年下の小娘だ。

「また、ここへ来てもいいよね」

お峰は震える声で懇願した。時三郎を見上げる潤んだ瞳が、一途な想いに揺れている。

堪えきれなくなった涙が一筋、流れた。

「ああっ、もう。泣くなっつってんだろ」

時三郎は娘を抱き、頬を伝う雫に唇を寄せる。まだ温かな涙を吸い取った。抱き寄せた肩は、細く頼りない。

「悪かった。声を荒げて、すまない」

お峰の瞳が、驚いたように瞬いた。

「ここへ来ていい。……いや、どうか、これからも来ておくれ」

背を撫でながら、耳元で穏やかに囁くと、娘の表情が華やぐ。こくりと頷き、はにかみと喜びをないませにして微笑んだ。咲き初める花のような面差しに、男は思わず見とれた。

たった今、紅をさし、時三郎が手ずから作り上げたところだ。

おのれ好みの、おんなに。

「ときさぶろう、さん」

沈黙に耐えきれず、お峰は声をかける。応えの代わりに、男は娘の唇を塞いだ。

男の胸に顔を寄せると、とくんととくと鼓動が聞こえる。小刻みな律動が心地良い。一緒に胸の太鼓を鳴らしているようで、お峰は嬉しかった。

「俺が、怖くないか」

「いいえ、ちつとも」

男は確かめるように、娘の、瞳の奥を覗きこむ。

お峰はすでに帯を解かれ、着物の前を肌蹴はだけている。洗柿あらいがきの襦袢じゅばんの

うちに、温かく柔らかな肢体が息づいていた。

時三郎を、怖いとは思わない。だが、襦袢越しに触れる、火照った牡の塊に、少しだけ恐れを覚える。

襦袢の襟を割って、男の指先が滑りこんだ。絶え間なく流れる読経の声を聞きながら、娘は目をつむる。

男が指で辿った場所が熱い。頬も肩も、胸も臍も、全部だ。夢とおんなじだと、お峰は思った。

ねやごとを知らぬ生娘の肌に、時三郎は少しずつおのれを刻む。まだ芯の固い、胸の膨らみを揉みほぐせば、娘は抗うように身をよじる。そのてっぺんは触れられると縮こまり、ひしゃげた豆のようになった。

身をそらすたび、誘うように揺れる鶉色の豆粒に、男はむしゃぶりつく。体を走る甘美な痺れに、娘は小さく声をあげた。

「鳴いてもいい。でも大声は出すなよ」

囁かれて、お峰は真っ赤になる。

日暮れが近づき、いつしか読経は止んでいた。この静けさの中、あられもない声を上げたら、誰かが来てしまうのではないか。考えただけで恐ろしく、体を強張らせる。

だが、男は手を止めず、襦袢の紐を解いた。湯文字ひとつに剥かれた娘は、恥じらい、両腕で我が身を抱く。

日が翳り、薄暗くなった宿坊でも、まろみのある輪郭が見てとれた。時三郎は着物を脱ぎながら、それを目で眺<sup>なが</sup>める。

「叫びたくなったら、こいつを噛むといい」

脱いだ着物をお峰に渡し、男は覆いかぶさる。ひそやかに閉じた脚に、膝をこじ入れた。

触れ合う肌が温かい。かすかに生じた迷いが、ぬくもりに溶かされていく。

男の手が下草をまさぐっても、娘は怯まなかった。

開かれ摘まれ弄られて、甘い痺れが走る。熱い滴が滲みだすと、それはやがて疼きになった。

今まで感じたことのない、得体の知れないむず痒さが何なのか、お峰にはまだわからない。次第に大きくなる未知のうねりに、男の着物を唇にくわえ、耐えた。

「お峰」

「はい」

男はもう、お峰ちゃんとは呼ばない。茶店の娘でなく、一人前のおんなとして見てくれている。互いの隔てが消えたように思えた瞬間だった。

時三郎の手が、娘の小さな手を導き、猛りたつものに触れさせる。熱く、生き物のように脈打つそれが、おのが体に納まるとは到底思えない。ごくりと唾を呑みこみ、お峰は男を見返す。男の瞳には、

いまだ見たことがない昂りが揺らめいて、娘の心をざわつかせた。ふうと小さく息を吐く。

そつだ。ここから戻る道はない。

「時さん」

腕を伸ばし、愛しい男の首を、掻き抱いた。

その仕草に、時三郎の雄が猛る。

「これで、夫婦だ」

男は引導を渡すようにいうと、湿り気を帯びた狭間にあてがい、押し開く。

体が軋み、悲鳴をあげている。たまらず叫びを上げそうになるのを、お峰は着物の袖をきつく噛んで堪える。

暮れ六つの鐘が鳴った。尾を引く鐘声中、お峰は男を迎え入れた。

娘が涙を流していたのは、引き攣る痛みの子ではなかった。好いた男と、ひとつになれたのが、ただ嬉しかった。

この日を境に、お峰は、時三郎の元へ頻りに訪れるようになった。茶店のお峰ちゃんは、金輪寺に住みついた小間物屋に、すっかりのぼせちまってるらしいよ。あの色男かい、羨ましいねえ。

そんな噂が、村人たちの口の端に上り始める。噂話は、やがて娘の変化を不審に思っている、ふた親にも届く。

ある晩、お峰は、両親が話し合う声で目覚めた。

「あの男には、早々に村を出て行ってもらうよう、金輪寺のご住職に話をしてきたよ」

「そんなこといったって……あんた。お峰が可哀想ですよ」

「なあに、しばらくすれば忘れるさ。それより良い相手を探さないとなあ」

ひどい。

すーっと全身の血が冷えた。

おとつつあん、おつかさんは、時三郎と自分を引き離そうとして  
いる。

お峰は、夜着を引っ被ったまま、身を固くして聞いていた。

夜半、皆が寝静まったのを見計らい、娘はむくりと起き上がる。

身支度を整えると、そっと家を抜け出した。

参道には桜が咲き初めている。花冷えの空気も、星の見えない黒  
々とした夜の帳も意に介さず、好いた男の元へと急ぐ。

「時さん、起きて。ねえ、開けて」

宿坊の戸を叩く。

寝入っているとばかり思っていたのに、男は意外に早く戸を開け  
た。

「……入んな」

時三郎は、少し憔悴しているように見えた。

中に入ったお峰は、変化に気づく。頼りなく揺れる灯火に照らさ  
れた宿坊の内部は、蒲団も敷かれていない。商売道具の四角い荷は、  
きつちりと風呂敷に包まれ、背負われるばかりになっていた。

「黙って行こうと思っていたんだが……会えて良かったよ」

呆れるほど穏やかに笑う男の、着物の袖を掴んだ。

「……嘘だ。時さん、夫婦っていつてくれたじゃないか。ねえ、嘘  
だよね」

「これから俺は、江戸表へ行く。小さくてもいいから、店を一軒持  
ちたいんだ。いつまでも旅暮らしじゃ、おめえと一緒になれねえだ  
ろ」

時三郎は上がり框に腰かけると、草鞋を手に取り、お峰をひたと  
見つめた。

「必ず迎えに来る。だから待ってる」

「駄目だよ」

娘は激しく頭を振る。

「おとつつあんは、時さんを追い出して、あたしを他の男と添わせ  
るつもりなんだ」

草鞋を履く手が止まる。男の面に、苦しげな表情がよぎった。

紅梅の下で再び出会い、結ばれた。桜が咲くまでの合間に、何度  
も体を重ねあわせた。肌を馴染ませた娘が、悦びの声を上げるよう  
になったのは、ついこの間だ。

せわしなく喘ぐ愛らしい声も、立ちのぼるおんなの匂いも、男は  
よく覚えている。

すぐりつく娘の背を、時三郎は静かに撫でた。

「連れてって」

ぽつりと、お峰がつぶやく。驚く男を、氣力に満ちた表情で見返  
した。

「苦労させるかもしれねえぞ」

「かまわない」

「おとつつあん、おつかさんを裏切ることになるんだ。それでもい  
いのか」

ほんの少しだけ、娘の顔に暗い翳がさしたが、それを振り払うよ  
うに真顔になった。

「時さんと離れ離れになっちまったら、生きてる甲斐がないよ」

夜明けまで一刻ほど間がある頃、寄り添う二人の影が、参道を行  
き過ぎる。男は荷を背負い草鞋姿、娘は下駄のままだ。

生まれ育った茶店の前を通るとき、娘は一度だけ立ち止まった。

口の中で何か小さく呟くと、きつと天を仰ぎ、再び歩き出す。

五分咲きの桜が、風でゆらゆらと枝を揺らす。雲は晴れ、煎餅を  
半分こしたような月が見えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8640d/>

---

山茶花（さざんか）

2010年10月9日19時30分発行